

■ 米国ジョウゼフ・コンラッド協会 学会 “Conrad: Conflict and Solidarities” (Vancouver)

アメリカ・コンラッド協会主催の学会“Conrad: Conflict and Solidarities—A Conference of The Joseph Conrad Society of America at Fairleigh Dickinson University – Vancouver”が2014年8月13日～16日の日程でカナダ・バンクーバーにて開催された。同協会(JCSA)は、毎年、アメリカ国内のMLA (Modern Language Association)の年次大会において、その大規模なプログラムの中に2つのコンラッド部会をもつことで年1回の学会活動としてきており、このバンクーバーでの催しは、同協会による不定期の国際会議である。バンクーバーでの開催は、2003年にUniversity of British Columbiaを会場として以来、2度目となる。

なぜバンクーバーが開催地になるかといえば、求心力となるJohn Stape氏が在住という要素が大きい。今回は、市内中心部にある大学を会場とした4日間のプログラムで、基調講演(plenaries)4本、セミナー2つ、研究発表21本(各3本で構成される7セッション)で構成されていた。参加者は、プログラムに載った名前だけで数える限り、北米20名、イギリスを含むヨーロッパ10名、太平洋の対岸である中国、香港、台湾、日本から1名ずつであった。

このプログラム構成の特徴は、柱となる4つの基調講演(75分)が毎朝の最初に設定されていることであり、企画・立案にあたったStape氏によれば、「毎日の始まりが活性化され」かつ「プログラムに重点を与える(anchored)」ことを意図したとのことである。つまり、第一線のコンラッド研究者4名による各1時間ほどの発表は、そのままコンラッド研究の最新動向の一端を反映する、少なくとも、企画者はそのように位置づけたものと理解する。その4本は、以下のとおり。

①Mark Larabee, “Conrad and the Spaces of War”: コンラッドと第一次世界大戦中の関連づけをめぐり、1915年執筆の*The Shadow-Line*を中心に取り上げ、the Western Frontと作品中のline-crossingの呼応などが提示された。

②Allan H. Simmons, “Rescuing Conrad from his Editors”: ケンブリッジ大学出版局で刊行中のコンラッド作品の定本シリーズの編集過程での知見を紹介し、作家のオリジナル原稿が編集者(雑誌掲載および単行本刊行)などによって相当の変更が加えられた例が提示された。

③ Robert Hampson, “Conrad, the ‘Polish Problem,’ and the Transnational Activism”: 歴史用語としての“Polish Problem”をコンラッドのポーランド意識に拡大させ、日露戦争を詳細に時系列で辿りながら、“Autocracy and War”と“The Crime of Partition”を読む。2014年7月のカンタベリーでの学会での発表を継続したもの。

④ Daphna Erdinast-Vulcan, “Conrad, Malinowski, and the Anxiety of Storytelling”: 人類学者マリノフスキーの *The Diary* とコンラッド作品(特に *Lord Jim*)との intertextuality を探るもので、2011年のケープタウンでの学会で発表を継続したもの。

これら4本の他に筆者が注目したのは、“JCSA Perspectives”いうタイトルのもと、同協会の新旧3人の Presidents—John G. Peters (2007-8), Brian Richardson (2011-12), Christopher GoGwilt (2015-)—によって構成されたセッションである。シンポジウムのような共通テーマで括られてはいないが、それぞれの“the epistemology of space,” “the power of the unspoken in Conrad’s plots,” “switching scripts (Roman/Arabic/Russian)”といったトピックを併置することで同協会の立ち位置を参加者に示すという、企画者の意図が窺えた。

また、“Victory in its Centenary Year”と題された今年ならではのセッションがあり、3点の発表のうち、Mrs Schombergの役割に注目した Ellen Burton Harringtonの発表が理解しやすかった。なお、コンラッド作品の中で最初の映画化作品である *Victory* (1919)のDVD上映もあったが、このDVDは北米では容易に入手可能な様子からすると、定評のある映画なのであろう。

個々の研究発表については、全点に言及した報告が同協会の Newsletter である *Joseph Conrad Today* (Fall 2014)にすでに掲載されているので、ここでは、“Conrad in Asia”というコンセプトのもと、東アジア地域からの4人の参加者の発表をみておく。Pei-Wen Clio Kao (台湾)はポストコロニアルの視点から“YOUTH”における East/West の力関係の逆転を論じ、Xiang Lan (中国)は *Heart of Darkness* の比較テキストとしてパトリック・ホワイトの小説 *A Fringe of Leaves* という意外な作品を用い、Melissa Lee (香港)は、やはり *Heart of Darkness* について、“hospitality”をキーワードとする“transcultural dialogue”を論じた。筆者は、コンラッドとラフカディオ・ハーンとの同時代性を示したうえで、コンラッドによる日本言及の特徴についてハーン研究の援用を試みた。

この学会は、先行した7月のイギリス・コンラッド協会の年次大会とは、参加人数や発表本数といった規模では比較にならない。しかし、バンクーバーというコンラッドには無縁の場所に第一線の研究者を集めて国際会議を成立させた企画者たちの力量に敬意を払うとともに、「秘訣はプログラム構成の技にあり」と、特記しておきたい。

本学会での口頭発表のいくつかは、*Conradiana: A Journal of Joseph Conrad Studies*の学会特集号に収録・出版される予定である。同誌は数年ほど刊行が停滞していたが、2013年に同協会が編集を直接担当することになった経緯が報告された。それまでは編集は研究者有志による持ち回りという弱点があったが（*The Conradian*がイギリス・コンラッド協会の機関誌であるのとは事情が異なる）、2011年付の号からは協会の主力メンバーによって構成される編集委員会（編集長 John Peters）が円滑な刊行を担っており、広く投稿を求むとのことである。

（しだら やすこ 武蔵大学非常勤講師）